# 論說

# 非命の死と道路行政

## ――發明の增進と生產の制限――

田川大吉郎

## 一

新聞を見つゝ毎々驚かさるゝことは、情死と自殺の多いこと、飛行機の難の多いこと、滿洲に於ける土匪の襲擊が絕えず、あたら帝國有望の青年がそれに斃れつゝあることである。

これらの報道に對する人々の感動は、いづれ甲乙なく、いづれ厚薄なく、いづれにも同情し、いづれをも悲嘆して居らるゝことであらう。何うしたらいゝか分らないけれど、何うかする方法はないものかといろ〳〵に心配して居らるゝことであらう。

私もそれを氣にしつゝある一人であるが、私はそれと同時に道路上の日々の事故に對して同樣の注意と心配とを禁じ得ない。

尤もその道路上の事故は日々の新聞に多く現れない、それが有名な人の事か、若くば、目立つた悲慘の出來事かでなければ殆んど報道せられない、外國の新聞には常にある一週間ごとの統計、一ヶ月ごとの統計、一ヶ年ごとの統計の類は、日本の新聞には滅多に記載せられない。

近着の英國新聞には、次の如き統計が掲げてあつた。

一　本年六月二十九日に終る一週間の事故

英國全體に於て

死者　百十三人

負傷者　五千三百一人

ロンドンに於て

死者　十八人

負傷者　一千三百七十一人

二　同日に終る前六ヶ月間の事故

英國全體に於て

死者　二千九百七十一人

負傷者　九萬八千百十五人

ロンドンに於て

死者　五百四十七人

負傷者　二萬五千四百四十八人

英國のことながら其の多いのに驚く、米國のは更に多い、殆んどその五倍位ゐ或はそれ以上であらう。斯くまでに多い原因は主として自動車の多いことに卽せらるゝ、日本の自動車は米國ほどに多くなく、英國ほどにも多くないから、從つて事故の數が兩國ほどに多くないのは當然であるけれど、しかしながら頗る多く、例へば左表の如くなつて居る。

三　昭和九年中(最近の發表)東京市に於て

死者　五百一人

負傷者　二萬一百四十人

以上合計　二萬六百四十一人

ロンドンの死者は半歲で五百四十七人だから丁度東京の倍に當る割合にある。負傷者はそれよりも割合がやゝ高い、事故の大部分は兩者とも自動車によつて居る。

東京市の統計はロンドンに較べて斯の如く遲れ、時々の新聞紙上に報道せられないのだから、吾等はそれに對して考慮し反省する充分の機會を與へられてゐない。私はそれを殘念に感じて居る、何

か知ら社會上の不備の一と認めて居る、私どもは斯樣の事實に對しもつと深厚の注意を拂ふ機會を與へられなければならないのである。

さりとて、それらの事實を毎週毎月の紙上に報道して、その毎週毎月の經過を考慮し、前週に對して減つた殖へた、前月に對して減つた殖へたと、その經過增減に對して一喜一憂し、一嚬一蹙し、心を協せてその防止、回避、救濟の策を講じつゝある彼等の間にも、これを防止するに足る適當の方策はなかなか見出されないものと見え、自動車の速力制限位ゐを主たる防止の一方法と爲すものゝ如く、概してその樣の警戒を發するに止まつて居る、自動車の交通は禁じたくない、それは交通上の必要な利器である、しかしながらそれには人命の殺傷が伴ふから誠に痛し痒しである、それで彼等は、

交通機關の發達と共に交通事故が增加する、これを利用しつゝこれを防止する工夫はないものか、工夫がないとすれば利用を止めろとの說も起るのであるが、利用を止めずとも其の利を受けつゝ其の害を防ぐ工夫が何とかあり相なものである、何かないか。

と、もがいて悶へて苦慮しつゝあるらしい、若し遂にその工夫が無いとなれば、いよ〳〵由々しい大問題となるのであるが、私は其の半面の責任は道路行政者の上に在らうと思ふ、道路行政者には、たゞ道路の幅を廣ぐるばかり、そして、交通巡査に、今日の程度の取締を命ずるばかり、其の外には何等の途もないのであらうか。

## 二

何か新奇の方法があればと思ふけれど未だ見出されない、見出さるゝそれまでは、差詰め自動車の速力を制限する外ないとして、そこで各國ともその制限に心を碎いて居るが、無下に制限する譯にも往かないと見え、英國はそれを時速三十哩以下に定めて居る、それは日本のより速い方である、日本のは英國のより遲い方である、それ故に日本の事故が英國より少いといふか、それ故に日本の自動車の速力は今後も英國のより遲くし、成し得れば今日以下に制限すべしといふか、車の數に較ぶれば少いと謂へないのであるけれど、それらの觀察や論斷は他日に讓るとして、ロシアでは、その首都モスコーの改正計畫を立つるに當り、次の如く人口數制限の計畫を立てた勿論それは、現在以下に制限するのでない、將來の增加の最大數に制限を置き、それ以上に增加せしめないと定めたのである。たゞそれだけであるが、兎も角、それに標準を立て制限を設けた、これは一の新しい計畫であらう。

**モスコー市改正計畫の一班**

一　市民の總數を五百萬に制限すること

二　工場の設立を阻止すること

三　現存の路面電車を廢止しバスを以てそれに代ゆること

四　市の端から端へ通ずる三條の乘遊道路――ブールヴァード――を建設すること、其の廣さは

十六間である(百呎)同時に他の主要道路を擴築すること

五　市の周圍に廣大な綠林地帶を設置すること(綠林公園)

私は、この住民數の增加を制限する計畫が、道路幅を擴張する計畫と相俟つて、將來の交通事故を防止するに有効の一計畫であらうと考へる、彼等も、蓋、その樣の意圖を以て此の度の計畫を立つるに至つたものであらうと想察する、

○

とは云へ、モスコーの住民は近く五百萬に達し相な見込はないのである、現に現住の人口は約三百六十萬人で、殆んどそれに固定したらしく、近年の統計にそれの增減を見ることは稀である。

されば五百萬人といふのは、將來の發展を希望した想像上の人口に止まるのである、それだけ、此の度の制限計畫に飽き足らない感じを抱くのである。

慾を言へば、勿論、私一人の希望に止まるが、それを現狀の三百萬人程度に止めて欲しかつた。五百萬人に增されたくなかつた、其の方が將來の良き市を作る上には反つて有効であらうと思ふ、實は、近代の都市は餘りに大きく爲り過ぎたのである。そのために經濟上、社會上、種々の弊害を釀して居るのである。

住民の數を五百萬以下として、主たる道路を十六間若くはそれに近い程度に擴築し――赤の大通りと稱せらるゝ中心地帶は現在の三倍に擴築さるゝのでそこにはより廣い道路がある――工場の

建築を阻止して群集の雜沓を防ぎ且路面電車を撤廢すれば、その交通上の整理が著るしくらくになり、日々の發生事故が現狀よりも目立つて低下すべきことは、誰にも略ぼ想像し得らるゝことである、遠き將來のことにはなるが、モスコーが能く其の希望に副ひ得んことを期待する。

それに對し住民の數を制限しやうとせず、唯成り行き任せに反つてその增大を喜びつゝあるは米國の紐育と日本の東京である、紐育の住民は現に五百萬を突破して早くも六百萬の境に近づきつつある、そして增進の勢は尙も顯著で、將來は二千萬にも達せんとするらしい形勢であり、既にその樣の改正計畫を發表したものすらある、しかしながら他の方面の考察は且らく舍くとして、更に交通關係の方面だけから考へても、現在自動車の輻輳に困り切つて居る紐育が、何うしてその二倍以上三倍もの群集を適度に交通せしめて故障なからしめたる保證が出來るであらうか、私には無謀のことの如く思はれてならない。

東京市は大東京市を設定して、その住民數が既に五百萬人を超え世界第二位の住民數となつたといふことを誇りとして居るのである。

何年になつたら、東京市が其の全區域を近世的都市の如くに修築し、都市としての形體に恥かしからぬ設備を完ふするに至るかは、まだ〳〵不明で、前途頗る遼遠のことであるから、從つて其の建設の方針、設備の計畫は、今に於て尙何の樣にでもなることである、その何の樣にでも爲し得らるる今日の機會に於て尙深く考慮して百年の悔ゐなきを期すべきであらう、交通事故の頻々として起り、あたら

有爲の市民が、むざ〳〵と非命に死しつゝある今日、重點をその事故防止の上に置いて、それを將來に防止し得る道路計畫、都市計畫を立つることが必要事であらう、自動車計畫が大規模に進みつゝある此の際に於て殊にその注意を願ひたい。

ロンドン、その大ロンドンは、現に、七百萬人を超へ大多數の住民を有する世界第一の都會であるけれど、彼等は、もはや、其の人口數を以て優劣を世界に爭ふ無益の爭ひを今後に爲さないであらう、一都市を無限に擴大して多數の住民をそこに壓搾することの不利にして無用なことを彼等が既に氣着いた所である、彼等は寧ろ小都會を各地に作らんとして居る、それを適當の距離に散在せしめて、その間の連絡を便利にし、大都會ならずして、大都會以上の利益を擧げ得る方法もがなと彼等は苦慮しつゝあるのである、所謂衞生市を以てロンドンの周圍を取り卷き、相待つて互に都市生活の利益を完ふせんとするが如き彼等の近年の計畫は卽ち其の一端の現れである。

この時に當つてロシアがモスコー市の住民總數の限度を定むるに至つたことは相當意味の深いことである、私はそれを特に道路事故防止の方面より見て注意の必要を叫びたい。

## 三

顧れば近年の世界は制限の時代である。

第一に軍備縮少の世界會議がそれである。日本は國際聯盟を脫してそれらの束縛から離れたと

いふけれど、ロンドンの海軍縮少會議の將來には尙望みを屬して居り、日本の提案はその縮少を可能ならしむるためだと聲明して居る。

第二に大學が大き過ぎる、一學校に一萬も二萬もの學生を集めて何うして有效に教育することが出來るか、近來の社會上政治上の幾多の弊害は皆これから起つて居る、昔の家塾の如く數十人、多くとも數百人の少數學生に制限すべきである家塾を起すべきである、小規模の學校を起すべきであるといふのが教育に對する今日の要求である。

第三に銀行會社の數が多きに過ぎた、これを少數に制限すべきであるといふて、銀行の統合、會社の合併が行はれた、それは好結果を奏したかといふに、好結果を奏した一面もあるけれど、好結果を奏せず、反對に苦悶を捲起した一面もある、銀行會社を中央に寄せ集めて、銀行會社の數を少くするには成功したけれど、銀行會社の資本を大きくして大銀行大會社を擁立したゝめ、都會の大資本家大事業家のためには從來よりも有利になるだらうけれど、地方の小資本家小事業家のためには不利になり、地方の財源は枯渴して地方は反つて疲弊するに至つた、それは大規模の學校を分解して小規模の學校に還流せしむるでなしに、小規模の學校を閉鎖せしめて大學校に投合せしめた樣なものである、一面には制限の要望に合したけれど、一面には制限の要望に逆行したのである。

第四、人口すらも多きに過ぐるとの說があつて產兒制限の運動が行はれつゝある、日本にはそれは行はれないといふけれど、それは來面の話で、事實は可なり廣く行はれて居るといふことである。歐

洲諸國は戰爭に全面的に反對して居ると認められ、伊太利の今日の如き場合に於てすら、伊太利の青年が、心から奮起して居るやは疑はしい程である、それ程歐洲には戰爭否認の聲が勢を得て居るけれど、それでも人口制限の上から戰爭を承認して居る者がないではない、若し戰爭がなければ人口は增殖して社會は難儀を增す、その難儀を低減するため戰爭は有效である、それに由つて人口が減少するからと申すのである。

第五、それよりも所謂操業の短縮、生產の統制がそれである。

日本の主要の產物は米と、生糸と、紡績であるが、今はその三者とも生產統制の、卽ち生產制限の厄に逢ふて居る。

最近に於てそれの最も顯著なものが紡績である、彼等は早くからその必要を認めて旣に約三割近く操業短縮を行ふて來た、それでもその短縮が未だ足らない、更に短縮する必要を認むるといふて最近更に協議を重ねた、それは此の八月のことであつた、十月までは此のまゝに据置きつゝ、その頃になつて十一月以後のことを議する、その時は多分より以上の短縮をすることにならうといはれる。

實に、精巧の機械が出來て來た、日に〳〵出來つゝある、それを据つけねばならぬ、それを据つければ從來に倍する生產が出來る。しかし、需要が伴はないから、それを充分に動かして充分に生產すれば過剩になる、故に制限して生產しない、三割なり四割なり操業を短縮して生產を差控へそれだけ機械を遊ばせて置くといふのである。矛盾の極、浪費の至りといふのは此の事であらう。

しかし、それが米にも必要であり、生糸にも必要であり、石炭にも必要であり、紙にも必要である、何にも、かにゝも必要である。たゞ飛行機に必要でない、大砲に必要でない、彈藥に必要でないといふのである。

然り、總じてこれを言ふ、今は制限の必要な時代である、何事も、何物も、皆制限されつゝある、制限して需給の調節を保ち、制限して主客の必要を充されつゝある時代である、昔は缺乏の時代であつた。何うしてその缺乏を充すかゞその頃の時代的精神であつた、要求であつた、機械はそのために發明された、しかし今はその發明が既に足りて過剩の時代となつた、今はその過剩の生產力を制限し何うして過剩ならざらしむるを得るかの時代である。時代の精神要求が根底から一變した。

第六、この時に當つて自動車の速力を制限し、大都市の人口を制限し、都民の交通を安全にして、都民の幸福を保全し、都會の繁榮を確保せんと考ふる者の起つたことは、時勢の變、自然の人情であらう

## 四

繰返して申す、交通事故の發生を防止し、その安全を保障するは、道路行政家の責任である、たとへ、それの全部の責任はなくも、責任の大半は道路行政家の上に在る。

しかるに其の事故は年と共に增進するばかり、些しも低減する傾向がない、その可能の計畫傾向が認められない、これは道路行政家の恥辱であり責任の失墜である、深く省察し發憤すべき所であらう。

都市の膨脹に制限をつけかけたモスコーの例は未だ範とするに足らないかも知れぬ。しかしながら近代の都市事業に曾て進歩の一線を劃した英國のチェンバーレインは、一都市の住民數に理想の標準を立てて、それを五十萬以下に止めたい、五十萬以上ではいけないと唱道したことがある、そして制限の氣運が各方面に湧きつゝある今日である。今こそは此の問題をも眞劍に各方面より研究し進んで實施すべき恰好の時かと思はれる。

道路行政家の方面より見たる此の計畫の得失利害を知りたい者である、私はその研究發表を仰ぎたく思ふて此の篇を草した。

尤も此の問題は角度の多い問題であつて、各種の方面より考へられねばならない。私は、その心持で此の篇を書いたので、決して單なる道路行政の方面のみから考へて居るのではない、それでも其の趣旨を或は諒解せらるゝに至つたかも知れぬと思ひ、因て誤解の無からん樣、念のため斷つて置く次第である、不文の罪を恕せられたい。